赤壁の戦い

「中国詩跡事典」植木久行編（研文出版）

後漢末の建安五年（二〇〇）、官渡の戦いでで袁紹を破り、華北を制した魏の曹操は、天下統一の野望を果たすべく、建安十三年（二〇八）、八十万と号する水軍を率いて南下した。この空前の大軍を前に、呉の孫権は劉備と軍事同盟を結び、三十四歳の勇将周瑜に呉の命運を託した。周瑜はわずか三万の水軍を率い、赤壁で曹操軍と遭遇する。戦局は明らかに不利であったが、敵船の密集ぶりに気が付いた老將黄蓋が火攻めの戦法を周瑜に進言する。そして黄蓋自ら投降をよそおい、油をかけた薪を十艘の船に積みこみ、敵船に近づくや火を放った。燃え盛る船は、折からの東南の風にあおられて、矢のように突き進み、曹操の水軍は炎の渦につつまれた。かくして曹操の野望は打ち砕かれ、天下三分の情勢が定まりゆく。劣勢であった周瑜が赤壁の戦いで勝利を収めえたのは、折よく吹いた東南の風のお陰であった。

赤壁古戦場

「三国志、歴史紀行」（尚交社ジャパン）

赤壁古戦場の正確な地点は後世の解釈がまちまちで、決めるのが難しい。隋、唐以来、湖北省内の長江と漢水の流域に次の五つの赤壁が出現している。

蒲圻（ほきつ）、黄州、武昌、漢陽、漢川

どれが本当の古戦場なのか。まず、宋代の蘇軾の黄州赤壁説があるが、中に「古壘西邊、人道是、三國周郎赤壁」と述べられているが「人道是」とあるので題を借りて自分の心境を述べたに過ぎない。ここは「東坡赤壁」とか「**文の赤壁**」と呼ばれている。漢陽、漢川、武昌の赤壁は史書の記載とあまり符合しないので、ここでもない事は明らかである。史料にある赤壁の戦いの地形や戦況の記載、出土品の発見状況から、当時の蒲圻の赤壁山がそうだろうと言われるようになった。これを「蒲圻赤壁」とも「**武の赤壁**」とも称している。

蒲圻赤壁は蒲圻市の西北約四十キロの長江の岸にある長嶺山の三つの隆起の内一番北側を赤壁山と呼ばれ、その長江に面した絶壁の上に翼江亭がある。ここは呉の水軍を指揮した周瑜が立っていた場所だと言われている。北岸に「火焼烏林」があり、曹操が陣を置いていた。烏林側の火の手が南岸の石の壁に真っ赤に映ったので「赤壁」という名が付いた。

赤壁歌送別　李白（律詩の首聯、頷聯の四句）

二龍爭戰決雌雄　二龍 争戦し 雌雄を決す
赤壁樓船掃地空　赤壁の楼船 地を掃いて空し
烈火張天照雲海　烈火 天に張りて 雲海を照し
周瑜於此破曹公　周瑜 此において 曹公を破る

《通釈》魏の曹操と呉の孫権、二匹の龍の如き両雄が、雌雄を決すべく戦いに臨み赤壁に集結した魏の楼船は、呉軍の火攻めにかかり一掃されて壊滅した。燃え盛る炎は天空にみなぎり、果てしなく広がる雲を紅く染め、若き呉の指揮官周瑜は、この地で曹操の大軍を打ち破ったのだ。

（中国詩跡事典より抄出）

赤壁　杜牧

折戟沈沙鐵未銷　折戟（せつげき） 沙に沈んで 鉄は未だ銷（しょう）せず
自將磨洗認前朝　自ら磨洗（ません）を将って 前朝を認む
東風不與周郎便　東風 周郎が与（ため）に便（べん）ならずんば
銅雀春深鎖二喬　銅雀 春深うして 二喬を鎖（とざ）せしならん

「周瑜像」蒲圻

《語釈》赤壁：黄州西南にある「文赤壁」「東坡赤壁」で、蒲圻の古戦場よりやや下流にある。**銅雀**：魏の曹操が都の鄴（河北省臨漳）に建てた台。**二喬**：荊州喬玄の二人の娘。美人姉妹で、姉の「大喬」は呉の孫策に嫁ぎ、妹の「小喬」は周瑜の妻となった。音楽好きで色好みの曹操がこの二人の美女を手に入れる為、呉を攻略したと「三国志演義」には取り入れられているが、史実ではない。

《通釈》折れた戟が岸の砂にうずもれて、その鉄はまだ錆びていない。それを水で洗って磨くと、これは三国時代のころの物だと分かった。東風がもし呉の周瑜の為に味方してくれなかったら、姉妹は曹操に捕えられ、春深い頃、銅雀台に閉じ込められていただろう。

（杜牧一〇〇選より抄出）

二つの赤壁の位置

「武の赤壁」蒲圻（ほき）

「文の赤壁」黄岡